
霊幻彼氏

南 晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霊幻彼氏

【Nコード】

N8925Z

【作者名】

南 晶

【あらすじ】

クリスマスイブに恵理が電話で呼び出した元カレ、孝之。イケてる外見に合わず頑固で一途だった孝之を10年前に捨てたのは自分だった。

イブの夜に孝之と再会し夜を共にした恵理は、別れた事を後悔するが、時既に遅し。孝之は3年前に死んでいたのだった。

前に書きました短編『クリスマス・イブ』の続編です。

1 (前書き)

季節限定で書きました短編『クリスマス・プレゼント』の続編です。
宜しければ、そちらもご覧下さいませ。

「いらつしゃいませ〜！恋人にチョコレートはいかがですか〜！？」

時は寒さ本番の1月末。

地元の百貨店の入り口で、あたしは寒さに震えながらワゴンに入つたチョコレートを売りつけようと、声を枯らしていた。

たった2ヶ月前まで大阪で出版社に勤務していたあたしが、何故、田舎の百貨店でバレンタイン商戦のアルバイトをしているのか。

答えは簡単。

会社が倒産したからだ。

結局、あたしは仕事が失業した今、大阪で一人暮らしをしている理由がなくなつて、実家に帰ってきてしまったのだ。

失業保険が出ている間は、定職に就く訳にはいかないの、こうやってスポット的なアルバイトを職安で斡旋してもらつては日当を稼いでいる毎日だった。

今までの貯金があるのと、実家にいるのとで、差し迫つて生活費に困るわけではないが、35歳の独身女性がいつまでもこの状況ではマズイと自覚はしていた。

だからと言つて、この年になつていきなり正社員の仕事は見つかる筈もない。

今の所は就職活動をしながらか遊んでいるよりはマシなこのアルバイトを2月14日まで入れてしまったのだった。

「松本さ〜ん、メチャクチャ寒いですね〜！あたし、もう凍え死ぬかも〜」

一緒にバイトに入っている女子大生の鈴木裕香ちゃんすずきゆうかがガタガタ震

えながら、手を擦り合わせて泣き声を上げた。

「頑張るのよ！今日は6時まででいいって、チーフも言ってたし」
「え〜、まだ3時なのですか？まだ3時間もここにいろって事
〜・〜・〜ってか、バレンタインまでまだ2週間もあるのに、売れる
わけないですよ〜」

「売れないと思うけど、他の店が売り始めてる以上、やらない訳
にはいかないんでしょ。そのお陰で雇ってもらってるんだから、文
句言えないじゃない」

「そりゃ〜そ〜ですけど〜・・・外でやる必要は全くないですよね
〜」

それにはあたしも同感だった。

ただでさえ風の強い海沿いのこの街で、真冬に外でチョコレートを
売るなんて狂気の沙汰だ。

激安家電店にいるネット回線会社のキャッチ部隊のような、ペラペ
ラのウィンドブレーカーが制服として配給されているが、この強風
の中ではあまり意味をなしていない。

道行く客も、ワゴンの中をチラリと一瞥するだけで、さっさと歩き
去っていく。

何時間もここに立っているのに、あたしから買ってくれた男性はま
だ一人しかいなかった。

思い出すのも困難な冴えない風貌の中年男だったが、あたしがあま
りにしつこく押し付けたものだから、同情で買ってくれたようなも
のだ。

あたし達は、あたかも『マッチ売りの少女』のように、「チョコは
ありませんか〜」とか細かい声で叫び続けた。

長い間、一人暮らしたかったあたしが、この街に戻ってきたのには、

ちよつとした理由があつた。

収入が無くなつて生活できなくなつたのは勿論のだが、クリスマスに起こつた不思議な体験が、あたしをこの街に留まらせていた。

クリスマスイブの夜、コタツの中で酒を飲んで酔つ払っていたあたしは、突然、10年前に別れた（厳密に言えばあたしが捨てた）元カレ、井沢孝之いさわたかゆきに電話する事を思いついた。

10年も前のケータイ番号がまさか繋がるとは思っていなかったのだが、何と孝之は電話に出た。

その時、家に誰もいなかったのをいいことに、あたしは彼を呼び出し、話をして、そして10年ぶりに体を重ねた。

問題はその後だった。

彼に再び逢おうと目論んで出かけた同窓会で、孝之は3年前に交通事故で死んでいる事を聞かされたのだ。

悲しむどころではなかった。

驚きのあまり、あたしは只々、呆然としていた。

あれは幽霊だったのか。

もしくは、酔つ払つたあたしが見ていた夢だったのか……。

でも、あたしは確かに彼とやる事はやつた。

彼の滑らかな筋肉質の肌の感触まで、まだはつきりと思い出せる。

真相は分からないまま、あたしは何度も彼に再会しようとケータイに電話を試してみた。

だが、一度は繋がった筈のケータイからは、「お掛けになつた電話番号は現在使われておりません」という、お馴染みのアナウンスが流れるのみだった。

それから、彼の事が気になつて、あたしは仕事が決まるまでは、彼が生きていたこの街に留まる決意をした。

何故って・・・。

あたしは気付いてしまったのだ。

彼と別れて後悔していた事を・・・。

天然の茶髪に色素の薄い琥珀色の瞳。

陸上部で鍛えた長い筋肉質の手足。

スラリとした長身は完全にモデル体型で、遠くからでも人目を引いた。

そんなイケメンをあたしは10年前、つまり25才に時にフツてしまったのだ。

彼はチャライ外見に似合わず、真面目で几帳面で、しかも口が悪くて、乱暴で、融通が利かなかった。

昭和のオヤジかというくらい、頑固一徹、そして、優しい人だったのだ。

そして、あたしは彼に反して、いい加減で移り気で、所謂、八方美人な人間だった。

今、思えば、相反するあたし達だったから、お互い好きになったのかも知れない。

人は自分がないものを求めるのだから。

でも、一途な彼は、時にあたしを束縛した。

まだ、若さを持って余っていたあたしは、彼とこの街で一生を終える事は考えられなくて、彼が結婚を口にし出した時、別れを告げたのだ。

結婚ってホントにタイミングの問題なんだと思う。

今、35歳で切羽詰ってるあたしなら、二つ返事でOKしただろうに。

今更、後悔しても遅過ぎる。

何と言っても、彼は3年前にもう死んでいるのだ。

あのクリスマススイブの不思議体験は、神様がくれたトキメキのプレゼントだったんだろう。

でなければ、実はあたしを恨んでる孝之の幽霊だ。

どちらでもいい。

あたしはもう少しの間、彼との思い出が残るこの街に留まりたかった。

「ねえ、松本さん、幽霊って信じます〜!？」

ぼんやりと孝之の事を回想していたあたしは、突然、タイムリーな質問をされて飛び上がった。

まさか、あたしが霊の事を考えていたとは思わない裕香ちゃんが、ワゴンの反対側から手に息をハ〜ハ〜掛けながらこっちを見ている。

「な、なんで!?!ヘンな事言わないでよ。気持ち悪いじゃん」

「でしょ〜!?!でも、この百貨店の裏に商店街のアーケードがあるじゃないですか〜。そこに怪しげなカフェができたんですよ〜。占いカフェって言って、死んだ人ともお話させてくれるんだって〜。

メチャ、胡散臭くないですか〜?」

・・・胡散臭い。

でも、その時、藁をも掴む心境だったあたしの胸はドキン!と鳴ったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8925z/>

霊幻彼氏

2011年12月28日02時04分発行